

1-1) 在郷町の佇まいをつなぐ町並みとその保存にみる歴史的風致

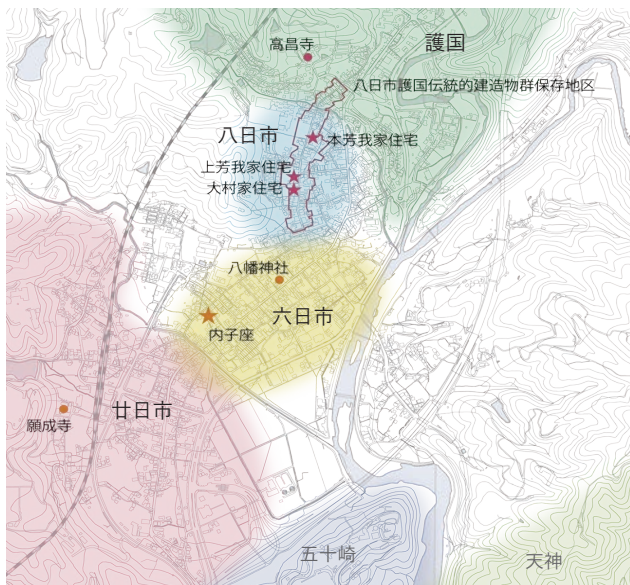


昭和 50 年代の八日市地区



現在の八日市地区

■地区の位置及び範囲図



□はじめに

内子地区の中心部は、江戸後期からの和紙や木蠟の生産によって、また古くに設けられた市から発展した商業の賑わいによって栄え、同時に街道沿いに町並みが形成されていった。大火もほとんどなく、当時の建造物の多くが長く使われ続けた。

しかし、戦後、昭和 30 年代に始まった高度経済成長期、内子町においても人口流出や大規模な開発が進み、都市化が進んでいた。

そのような中、失われそうな地域の歴史・文化に危機感を抱きその価値を提唱する住民も現れはじめ、またそれが地域の魅力として観光振興など活性化も期待され、町並み保存運動へと発展していった。ひいては内子町全体のまちづくりにおける価値基準の転機にもなった。

町並み保存は単に建物を残すということではない。歴史的建造物は、人々の知恵や技、地域の風土、社会的環境などを色濃く表している。その佇まいを守り、次代へつなぐことであり、それが現代まで連綿と受け継がれているのである。

1 内子地区の町並みの形成

在郷町として「まち」が整うとともに街道沿いに町並みが形成された。

始まりは弘化 4 年 (1848) の『六日市永久録』によると、文永 8 年 (1271)、廿日市に願成寺を一遍上人智真大和尚が開山し、以後この寺を中心に徐々に東へとまちが広がったと考えられている。

寛政 12 年 (1800) の『大洲旧記』によると 14 世紀中頃に当時五十崎郷の一部であった廿日市に市が立てられ、また巖島神社の「荒えびす」を勧請して廿日市に鎮座させた。その後、高昌寺の下に立てられた七日市 (のちに八日市へ変更)・六日市が発展し、現在の町並みの原型ができたとき

れる。これら3つの市は現在も地名として残っている。

この市によるまちの広がり、松山ー大洲街道（金毘羅街道）や四国八十八カ所巡拝の遍路道沿いに発達。また和紙や木蠟の生産の隆盛や小田川の舟運による交通の要衝としても賑った。明治後期から大正期にかけて、六日市は宿屋や料理屋、置屋、菓子屋、呉服屋、医院、造り酒屋などが並び、八日市は隣接する護国地区とともに製蠟業者や左官、荷馬車屋なども軒を連ねるようになった。市の始まりとされる廿日市は、中心部が東へ移ったことにより、農家集落として明治・大正期を迎えた。

この頃の地割は、明治初期及び後期作成の『喜多郡内子村耕地図』に見ることができる。また明治10年(1877)の『^{たてやしらべちよう}建家調帳』には各戸の所有者、建物の造りや寸法等が記載されており、これらを合わせることで当時の町並みの姿を読むことができる。これまで実施されてきた、歴史資料及び現地調査によって、六日市から八日市にかけての町並みは江戸後期から明治期にかけて整い、現在にまで受け継がれていることが分かっている。

2 重伝建地区及び周辺の歴史的建造物

(1) 主な建造物

①八日市護国重要伝統的建造物群保存地区

八日市護国地区のかつての街道沿いには江戸後期から明治期にかけて建てられた商家や町家が並ぶ。重伝建地区選定は昭和57年(1982)で、南北約600mの通り沿いに面積約3.5haと小規模ながらも往時の地割がよく残り、全棟数124棟のうち伝統的建造物が93棟で、路地や水路、石垣などの都市遺構とともに佇まいをとどめている。

八日市護国地区は明治期に最盛期を迎えた製蠟業が特に盛んであった地区で、現在の町



明治初期の八日市(明治9年(1876・推定)『喜多郡内子村耕地図』より)





八日市護国重要伝統的建造物群保存地区

並みはその頃に大半が形作られた。当地区内にある重要文化財の本芳我家住宅は、平成7年(1995)の『新編内子町誌』によると、明治中期に日本一の白蠟の生産量を誇った芳我家本家の屋敷で、「旭鶴」の商標で海外にも製品を輸出するなど隆盛を極めた。分家や、分家の分家が続き、それぞれ「上芳我」「東^{ひがし}芳我」「秀^{ひで}芳^{はが}我」などの通称で呼ばれている。当地区内及び近隣地区にも芳我家由来の建造物が多く残り、その一つ上芳我家住宅も重要文化財となっている。

また町並みの成り立ちとしては、街道沿いにおいて交通の要衝として賑わい、かつては宿屋や料理屋が並ぶ宿場町的な側面もあった。さらに護国地区は高昌寺の門前町としての性格も併せもっていた。現在も宿や飲食店、工芸品店などが並ぶ。重伝建地区中ほどに位置する重要文化財大村家住宅は江戸後期の建築であり、製蠟業が盛んになる以前からの町家の様子を今に伝えている。

このように町並みが長く残された理由としては、宝暦12年(1762)以降、まちを焼き尽くすような大火や大きな震災がなかったこと、戦災も免れたこと、またまちの中心が国道の開通などとともに南へ移ったこと、さらにはこの江戸後期頃からすでに質の良い建物が建てられていたことなどが挙げられる。現代に入っても内部改装で対応できる構造であり、また当地区の建物の特徴の一つ、漆喰で塗り込められた大壁は断熱や防火の役目も大きかったことも一因と考えられる。現在も修理を重ねながら大切に住み継がれている。



- 1_ 重要文化財本芳我家住宅(明治22年築、八日市)。内子最大の製蠟業者で芳我家の本家。凝った意匠の主屋と土蔵が特徴
2_ 重要文化財上芳我家住宅(明治27年上棟、八日市)。製蠟の生産施設の遺構も残る。現在木蠟資料館として町が運営
3_ 重要文化財大村家住宅(寛政年間、八日市)。内子では最も古いといわれるものの一つ

②旧伊達家住宅(「うちこの和 手しごと職人の家」)

重伝建地区内に位置する、明治期に造り酒屋を営んでいた伊達家の住宅。明治中期の一時期は製蠟業にも従事していた。屋号は「カドヤ」。明治10年(1877)の『建家調帳』に記載があることから、それ以前の建築であることがわかる。主屋は梁間、桁行ともに3間半で登り梁の構造、2階建。裏の離れに渡り廊下でつながる。主屋には水路上の通路と中庭の庇で隣家とつながっていた痕跡があり、両者が一体で整備されたことを物語っている。現在は「うちこの和 手しごと職人の家」として町内の木工や染物などの職人集団「内子手しごとの会」によって運営され、作品の展示販売や体験などが行われている。



旧伊達家住宅(現「うちこの和 手しごと職人の家」)

③藤岡家住宅(八日市・護国町並保存センター)

重伝建地区内に位置する藤岡家住宅は、梁間4間半、桁行6間半で登り梁構造の2階建。昭和53年(1978)の『愛媛県内子町伝統的建造物群調査報告書』によると江戸末期から明治初期の建築とされる。内子地区では江戸末期に多いといわれる意匠、2階正面の鼠漆喰や腰位置の海鼠壁が見られる。

かつては宿屋や紺屋(染物屋)、大工を生業としていたが、平成12年(2000)から町の関連機関、八日市・護国町並保存センターとして、重伝建地区に関する業務が行われている。また八日市護国地区町並保存会の事務所も兼ねており、町並み保存の拠点となっている。



藤岡家住宅(八日市・護国町並保存センター)

④大森和蠟燭屋

大森家は嘉永年間(1848～1854)より和蠟燭の製造販売業を行う。創業時は六日市地区に店を構え、平成6年(1994)に八日市地区の現在の建物へ移転した。重伝建地区外ではあるが同じ通り沿いに位置する。木造2階建、



大森和蠟燭屋



白髭稲荷大明神



そろった軒線と浅黄色と白の漆喰のコントラストが特徴



通り土間に並行した部屋の例（町家資料館）

きりつまづくり ^{さん}がわらぶき ^{ひら}いり
切妻造、^{さん}瓦葺、平入の町家で、1階は表土間を店とし、北西隅の板間奥を和蠟燭製造の仕事場としている。明治10年(1877)の『建家調帳』から、明治初期以前の建築であると考えられる。

⑤ ^{しろひげいなり} ^{だいみょうじん} 白髭稲荷大明神

重伝建地区内に位置し、境内は約48㎡。通りから5基の鳥居が連なり、奥に社殿を配する。これらは昭和59年(1984)に新築されたが、手水鉢に明治21年(1888)寄進の銘があることからその頃には祀られていたことがわかる。当時は製蠟業の最盛期で交通の要衝でもあり、商売繁盛や五穀豊穡の神として崇められてきた。上芳我家の分家、秀芳我家に太鼓などの祭礼の道具が受け継がれている。

(2) 歴史的建造物の特徴

重伝建地区及びその周辺の歴史的建造物は、木造2階建、平入、瓦葺が大半を占める。間口が狭く奥行きが深い短冊形の敷地が多く、主屋は裏庭に抜ける通り土間に並行して1列ないし2列の部屋をもつ。建物の規模により1列1間、1列2間、2列4間などの形式がある。

壁面は柱ごと塗り籠める大壁造がほとんどで、2階の軒裏の垂木まで塗り籠める。また1、2階ともに^{そでかべ}袖壁を付けたものも多い。2階の袖壁に瓦屋根を葺いたものも一部あり「袖うだつ」と呼ばれる。木部を表に出さないことで火災の際の延焼を防ぐ知恵である。土壁の仕上げには地元産の黄土^{きつち}が使われる。白の漆喰とのコントラストが美しく、この地区の特徴となっている。中には2階正面を鼠漆喰で仕上げている家もある。

正面の開口部は建築された時期によって異なり、江戸期のものは大戸^{おおど}と^{しとみど}蔀戸の構えで、蔀戸の前には床几^{しょうぎ}を設ける。明治期になると蔀戸に変わり格子を構えたものが建てられた。

■伝統的建造物の特徴（主な事例）



明治中期になると、外部の漆喰壁に様々な彫刻を施し、腰に海鼠壁を用いるなど、豪華な造りの家が多く建てられた。

大正期から昭和初期にかけては真壁造、2階建、瓦葺きの形式が多く見られるようになっている。

内部については、箱階段^{はこかいだん}が設けられていることが多いのも特徴の一つ。幅が半間ほどで階段下に引き出しを設けて収納としている。

またほとんどの家と家の間に水路や小路が設けられ、地域の年配者は「せだわ」とよぶ。これも防火に有効であった。また水路は石積みで造られ、「せだわ」だけでなく通り沿いの家の前にも張り巡らされており、勾配を生かした雨水対策の機能が早くから備わっていたと考えられている。

3 町並み保存に関連する活動・技^{わざ}

先人のつくり上げた町並みに住み継ぎ、開発の危機から守り、地域のアイデンティティーとして再興させてきた町並み保存運動。単に建物を保存する、ということではなく、歴史的な建造物とともに地域の歴史文化も含めて、地域住民の想いや努力、職人たちの技によって現代に受け継がれている。



2階正面を鼠漆喰や海鼠壁で仕上げ、塗格子を施した例



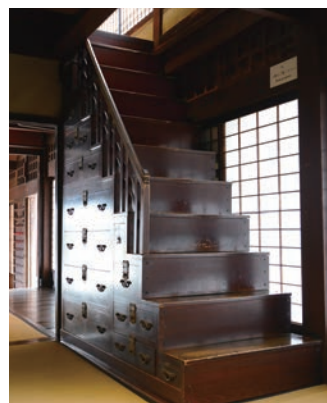
瓦を葺いた袖壁は袖うだつともいう



持ち送りで腕木を支える家も多く、年代で意匠が異なる



明治期になると平格子や出格子が増える



階段下に引き出しを備えた箱階段



家と家の間に設けられた小路や水路

(1) 郷土史等への意識高揚と町並み保存運動

①郷土史等への意識高揚

郷土史については、戦争などの破壊行為からその後のまちづくりを考えるうえでの重要性・必要性が当時から認識されており、昭和15年(1940)、「内子史談会」が設立され、歴史等の調査や機関誌『内ノ子史談』(同16年(1941)創刊号)の発行などが行われていた。

同30年代に入ると、高度経済成長の中で内子町においても国道の建設など大規模な開発が始まり、自然や伝統的な景観が急速に失われていた。

その一方で郷土の歴史・文化の大切さを訴えたり、開発に危機感を抱いたりする住民は存在し、同35年(1960)の内子公民館報には住民有志の間で郷土史の研究が進められていることが記載されている。翌36年(1961)の同報には、公民館での考古・郷土資料等約500点の展示の記事もあり、展示や報告会などを重ねることで徐々にそういった意識が浸透していった。同40年(1965)の同報には「滅びゆく民俗資料の保存を」「背伸びした文化生活 失われたものは何か」などという主張が寄せられるようになり、それには和紙や木蠟の生産など地域の隆盛を語る歴史資料の保存やそれらを生かした将来的な観光振興、子どもたちへの郷土教育等が提言されていた。

②町並み保存運動への展開

そのような流れの中で町並み保存に対する

一つの大きな契機としては、昭和45年(1970)に八日市の町並みに居を構えた画家井門敬二^{いもんけいじ}氏が、愛媛県文化懇談会美術専門委員として町並み保存を提唱したことが挙げられる。

同48年(1973)には内子町文化財専門委員会への「内子町八日市周辺町並み保存(景観保存地区の設定)の進め方について」の諮問・答申なども行われた。

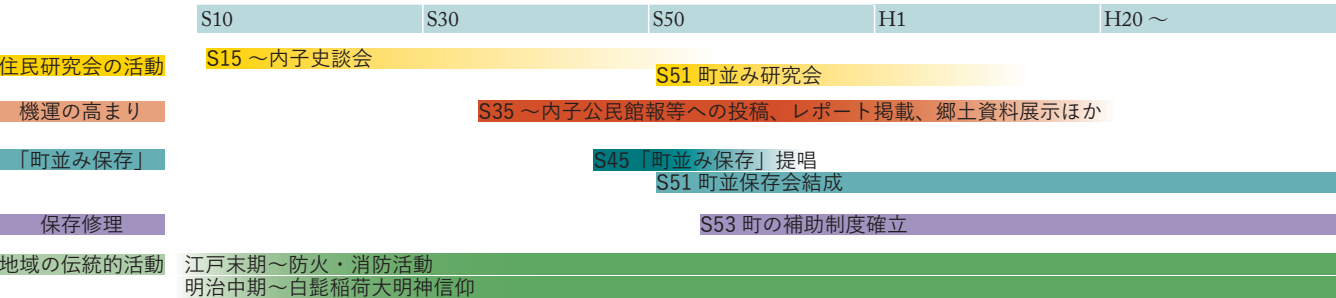
また同年には青年団等の長野県妻籠宿^{つまごじゆく}での研修レポートが内子公民館報に掲載され、さらには歴史・文化財等の魅力やまちづくりへの可能性の主張や、町並み保存の動きを歓迎する声が、その後も毎号掲載されている。まだまだ町並み保存への懐疑心が拭えていない人もいたが、住民たちは学習活動や妻籠・高山への視察研修を重ね、徐々に意識が醸成されていった。

一方で同50年(1975)には、雑誌『アサヒグラフ』(朝日新聞社)のグラビアで八日市の町並みが紹介されるなど、メディアからも注目されるようになった。

この機運の高まりは同51年(1976)、地区住民による八日市周辺町並保存会(現「八日市護国地区町並保存会」。以下「町並保存会」という。)の結成へとつながった。また同年、郷土史家を中心に町並み研究会が結成され、歴史などの調査研究も進んだ。

行政は翌年に町並みの本格的な調査を行い、同53年(1978)に町単独で修理・修景の補助制度を創設。「町並み保存」を進めるた

■町並み保存に関係する活動の推移



め地域住民による保存のための修理や、景観を考慮した修景が始まった。また郷土資料館の必要性などが町並保存会や町並み研究会でも議論され、同 55 年 (1980) には、木蠟資料館上芳我邸が開館した。

同 57 年 (1982) の重伝建地区の選定後は一段と機運が高まり、保存修理が進んでいった。これら建物の保存修理は、歴史的な価値の保存のため、痕跡調査などに基づく特徴を踏まえた復原を基本として行われる。近代の建造物についても周囲と調和するよう修景が行われる。地域住民の歴史的環境を守るという意識と理解のもと、漆喰の大壁や木製の建具の復原など、「便利」「安価」という近代化とは対極にある伝統的な工法等による修理が継続的に行われてきた。補助制度があるものの自己負担や規制も少なくなく、地区住民の努力を現在の町並みに見ることができる。

③町並保存会などの地域での活動

町並保存会は、町並み保存や地域の課題などについての積極的な学習や、先進地の事例研修等を続けている。マスコミや外部からの注目による住民の意識の変化も顕著となり、清掃活動など周辺環境の美化に取り組むようにもなった。また内子町の木蠟生産についての用具の収集や調査にも協力し、蠟打ち（蠟しぼり）の再現なども行ってきた。

これらの積み重ねにより町並みが評価されるようになる一方で、観光客のマナーや自動車の交通量など住民の暮らしへの影響も生じてきた。そういった課題にも町並保存会は考え、議論し、地区住民同士をつなぐ役割も担ってきた。

また平成 2 年 (1990) の『内子の神社・仏閣』によると、製蠟業最盛期の明治中期に祀られた白髭稻荷大明神も、明治期から地域住民によって清掃や油揚げのお供えなどが続け



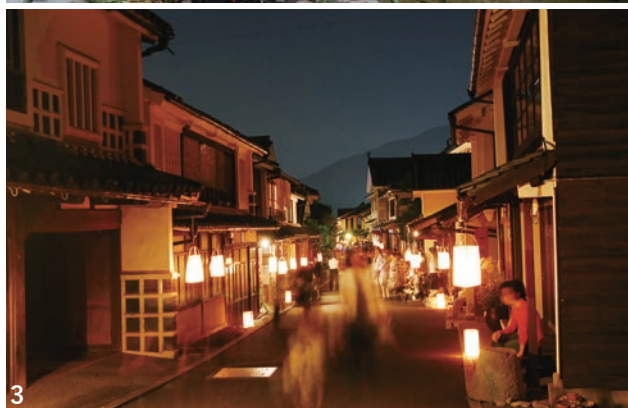
昭和 50 年代前半多くの町民が妻籠で研修



昭和 50 年代、町並みの奥に当時新築されたばかりの鉄筋コンクリートの内子中学校校舎（○印）が見える



現在の修理が進んだ町並み。中学校の校舎も周囲と調和するように木造平屋建に建て替えられ、ここからは見えない



1_ 道行く人が思わず手を合わす白髭稲荷大明神 2_ 新年の伝統行事「どんど焼き」 3_ 30年以上続く秋の催し町並観月会 4_ 防災についても真剣に取り組む 5_ 江戸期の手動ポンプ「龍吐水」

られ、往時の繁栄を今に伝えている。

近年では八日市・護国町並保存センターを拠点に、年始に無病息災を願う伝統行事「どんど焼き」やかつてのお月見の習慣を踏襲した町並観月会の開催など、伝統を守りつつ新たな文化を創造していくことにも取り組んでいる。

さらには子どもたちの土間づくりや蠟燭など体験活動を支援するなど、地域の歴史・文化の継承活動も行っている。歴史的な建造物の並ぶこの重伝建地区でこのような継承活動を行うことは、より一層、町並み保存運動に対する意識の醸成につながっている。

建物の特徴に表れているように、木造の町家はことさら防火対策に配慮されてきた。日常の対策も町並み保存の重要な側面の一つである。当町には明治15年(1882)の『内子村消防規則』が残っており、これが消防組織発生の母体となったと考えられている。当規則に謳われている「龍吐水」(手動のポンプ)については元治2年(1865)の芳我家のものが残っており、当規則以前から防火・消防活動が行われていたことがわかる。現在も消防団活動は継続されており、さらには重伝建地区住民による自主防災組織も結成され、防災ワークショップや重伝建地区専用消火栓の点検など、一層力を入れて実施している。

(2) 町並みを守る左官・大工等の技

重伝建地区及びその周辺部においては、黄色味を帯びた漆喰で塗り込められた土壁が特徴で、ここの町並み独特の暖かさを醸し出している。この色はこの近隣でとれる土による。漆喰壁、大壁造、袖壁、海鼠壁、塗り格子などに特徴をもつ建造物は在郷町としての成り立ちや製蠟業の繁栄を伝えるとともに、現在まで続く大工や左官職人の技術の集積でもある。現在は重伝建地区に住む矢野氏と市兼氏^{いちかね}をはじめとする左官職人によって町並み保存における左官仕事^{こまいだけ}が担われている。矢野左官は3代目、市兼左官は2代目であり、いずれの先代もその技をここで発揮してきた。矢野左官は、平成元年(1989)に調査された『旧内子町家名鑑』によると、明治42年(1909)頃は「やのや」の屋号で仕事をしていたことがわかる。当時は八日市地区だけで6軒も左官職人がいた。

左官仕事の手順としては、まず壁の下地として小舞竹^{こまいだけ}を組む。通常の壁や真壁であれば割られた竹で組まれるが、内子の特徴である大壁は、直径4～5cmほどの竹がそのまま使われる。何層にも土が付けられ、また柱ごと塗り籠めるため、高い強度が必要となる。

そこに発酵させた壁土を打ちつけるように付けていく。その後の乾燥が壁の強さを左右することにもなり、反対面を塗る「裏返し」のタイミングを見極めるのも職人技の一つである。このとき乾燥するまでの間は壁土の発酵した匂いが辺りに漂う。

壁土と一緒にシュロの皮を塗り込んでいくことも特徴の一つである。竹にくくり付けたシュロの皮を割いて広げながら層をまたいで塗り込むことで、壁の強度を増す役割を担っている。

仕上げは内子町近隣の山で採れる土を使い、その土の色による薄い黄色味を帯びた漆喰を塗る。ただし、破風部分^{はふ}は白漆喰で仕上げるのが内子流。重厚感ある瓦のグレーと柔らか味のあ



壁の下地となる小舞竹を組む



職人の後継者育成も急務



内子の歴史的建造物でよく使われているしのぎ棧瓦

《左官仕事の一例》



る黄土の大壁、その間の破風部分を白漆喰で締めるとい手法は、この地ならではの風景をつくっている。

内子地区の歴史的建造物に使われている瓦は独特の形状をしており、波型の部分が鋭角の「しのぎ棧瓦」が使われている。町並みの重要な景観要素の一つでもある瓦もまた、地元で生産されたものが代々使われてきた。

町並み保存には、左官以外にも竹材業者や木工・建具職人など、さまざまな職人が関わっており、長く続くその技は修理事業などを通して今に見ることができる。

肱川流域における竹材業は、平成4年(1992)の『内子町産業経済誌』によると明治10年(1877)に始まったとされ、その頃から内子町においても竹材生産が行われていた。昭和の中頃からは、金属や石油製品に代用され竹材業も徐々に衰退。現在、その技術を見ることは大変難しくなってしまったが、重伝建地区では壁修理の際に小舞竹が欠かせず、五十崎地区に唯一

残る山田竹材が竹材業として続いている。

また現在残る歴史的建造物が立てられた当時、主に明治前期は、昭和53年(1978)の『愛媛県内子町伝統的建造物群調査報告書』によると、内子地区だけで大工が30軒あり、当時最盛期だった製蠟業者数とほぼ同数であった。これら大工の中には指物大工と呼ばれる建具^{さしもの}などをつくる職人もおり、その技は共に重伝建地区の保存修理事業において今に見ることができる。さらには木工・建具職人の技は、「手しごと」として旧伊達家住宅（「うちこの和 手しごと 職人の家」）において、身近に手に取ることができる作品・製品にもなっている。

このように重伝建地区では現在も継続的に修理事業が行われており、年間を通して左官や大工等の技を見ることができる。建造物の所有者が守り続けるという意味をもって行う保存修理と、この職人たちの技は、いわば町並み保存を進める両輪である。その表れがこの重伝建地区をはじめとする歴史的建造物なのである。

(3) 和蠟燭づくりの技

内子町においては製蠟業は絶えてしまったが、木蠟を原料とする製品、和蠟燭をつくり続けている大森和蠟燭屋がある。現当主の大森太郎氏が6代目とされ、初代は嘉永年間(1848-1854)から蠟燭づくりを始めたと伝わる。

和蠟燭は、内子町をはじめとする西日本では燭蠟が主流である。明治23年～43年(1890～1910)の『諸統計下調書』によると、当時、生蠟(搾ったままの蠟)及び白蠟(晒して漂白した蠟)の割程度が和蠟燭の生産に使われていたことが分かる。しかしその後、安価な西洋蠟燭や電気の普及により需要が激減。生産量・職人ともに減少の一途をたどっており、現在、和蠟燭製造を手がける店は全国に15軒程度である。このような時代においても大森和蠟燭屋は後継者である7代目も父6代目とともにその技を受け継いでいる。

現在の大森和蠟燭屋の店舗は重伝建地区にほぼ隣接する明治初期以前の建造物である。大森家は以前は内子・六日市地区で店を構えてい



溶かした木蠟を何度も掛けて作られる

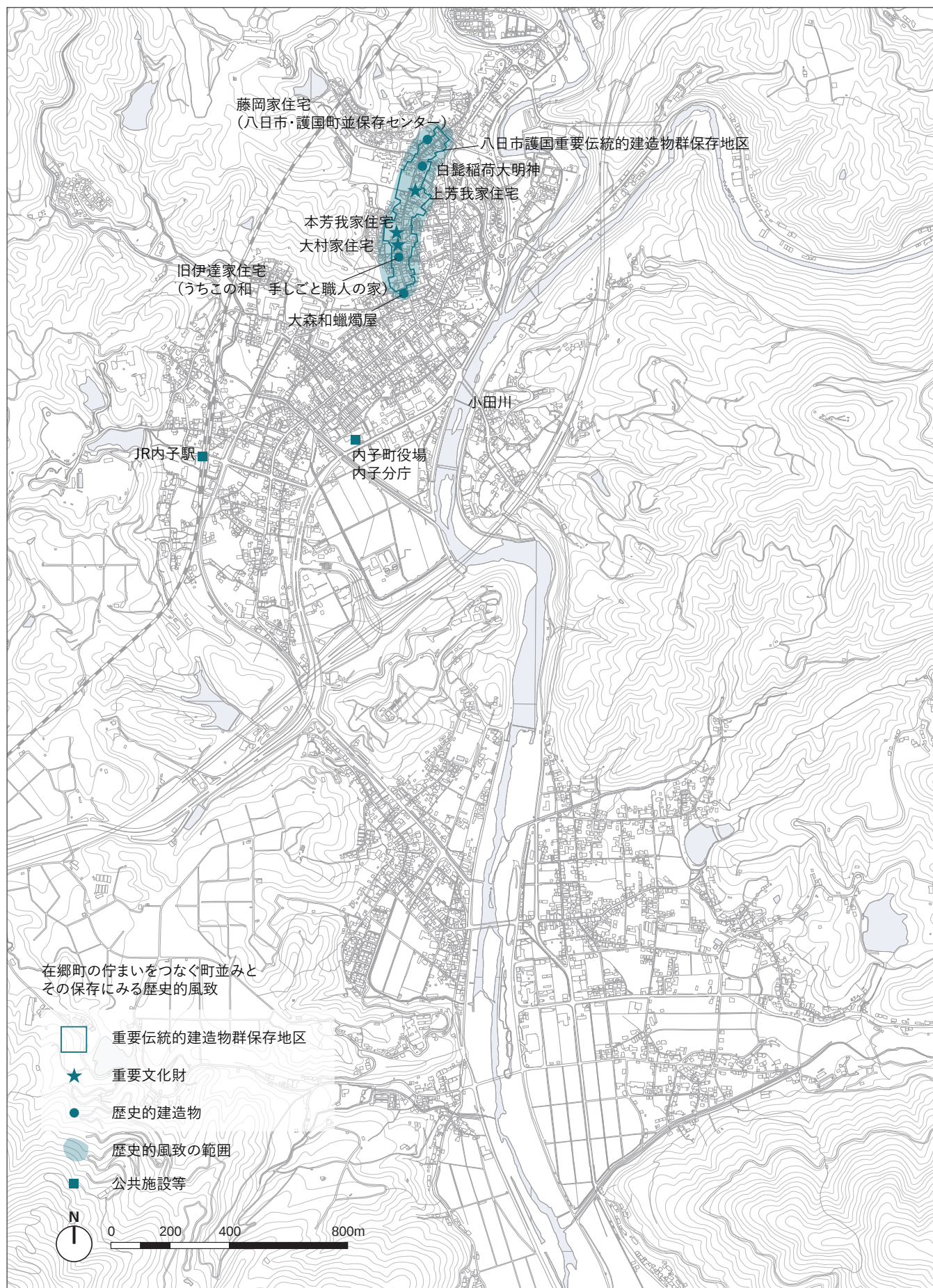
たが、平成6年(1994)より、ここに移転した。和蠟燭づくりは近隣に漂う溶けた木蠟の匂いとともに、内子が木蠟で栄えた時代をしのぶことのできる数少ない営みでもある。

重伝建地区における町並み保存は、一方で職人の技も後世へつなぐ役割を担っている。

□まとめ

内子の中心部は在郷町として栄え、特に八日市護国地区の町並みは、明治中期の製蠟業の隆盛によるところが大きい。堅牢な建物は大事に代々住み継がれてきた。それが現代になり、多様な価値観の中で地域住民が残す、守るという選択をしてきた。重伝建地区の伝統的建造物は、そこに暮らす人々の意思の表れであり、また長く続く左官仕事、和蠟燭づくりや竹材業、建具製作などの職人の技や伝統工芸をも伝える場である。

町並み保存は、ただ建物だけを残すのではなく、そこに生きる人々の日々の暮らしや歴史・文化を大切にする営みがあってこそである。それが今、さらにつながりを生み、地域内外を越え、老若男女の区別なく多様な交流が生まれる場所となっている。それはこの町並みが形成された当時も同様であったことは想像に難くなく、内子町にとって象徴すべき良好な歴史的風致といえる。



内子の製蠟業の起源は元文年間（1736-1740）に遡る。文政4年（1821）長浜の長老、佐々木源三兵衛義行編の『積塵邦語』によると、大洲藩領で一番始めに製蠟業を導入したのは五十崎の豪商・綿屋であるという。綿屋善六ほか2名が芸州可部より3名の職人を雇って蠟打ちをはじめたが、職人が高給であったため、使用人にこれを習わせ、領内の只海、六日市に伝えたとされている。

その一方で後に内子最大の製蠟業者となった本芳我家の記録では元文元年（1736）に製蠟業を始めたとある。江戸後期、本芳我家初代・芳我弥三右衛門が内子独特の晒し技術「伊予式蠟花箱晒法」を開発し、高品質の白蠟を大量に生産することが可能となった。加えて海外貿易の道が開け、白蠟の需要が高まったことを受けて大洲藩出身の商人・池田貫兵衛、河内寅次郎が神戸に白蠟輸出を手がける商社・喜多組を設立。旧大洲藩領産の白蠟の輸出を勧めたことにより、内子の製蠟業は明治半ばに最盛期を迎えた。最盛期には内子・五十崎の市街地だけで30軒以上の製蠟業者があり、中でも本芳我家は日本一の生産量を誇っていた。

商品の出荷は小田川の水運を利用して行われ、製品は知清や新谷にあった川船問屋に運ばれた。そこから帆掛け船で長浜まで行き、



上_製蠟業最盛期の頃の内子市街地。雪が積もったように白く見えるのが白蠟



右_大正時代の、五十崎での蠟搾りの様子

長浜から大型の船に積み替えられ、神戸・大阪まで運搬されていた。大正期に入ると、安価な代用品の登場により白蠟の需要が激減した。加えて鉄道の敷設などの交通網の変化により立地的に不利となり、それらも相まって内子の製蠟業者は大正10年（1921）には全戸廃業し、現在産業としては製蠟業は残されていない。



本芳我家の白蠟についての説明等が書かれた謹告書。英文と併記されている



本芳我家の商標の一つ「旭鶴」



出品化粧箱（レプリカ）